語を介在させて読むことを行います（例えば、泣き顔を見て、これに聴覚由来の言語である「悲しい」をあてはめます）。この言語は、多大な文化的時代的修飾を受けているものです（例えば、「悲嘆」・「悲しみ」・「sad」は、異なる民族で、異なる時代で、まったく同じ心を表しているとは言えません）。つまり、成人では、他者の心を自分なりの尺度で解釈していることになります。

これに対し、乳児期早期では他者の表情を見る視覚能力はまだ極めて限定的のはずです。この時期では、顔の特徴から個人を特定することもまだできないからです。そうすると、乳児期早期では、他者の心を知る情報を主に聴覚から得ているとするのが自然です。成人が思慮する他者の心の多様さに比べれば、乳児が受け取る他者の心ははるかに単純な直感的なものでしょう。この時期では、心を読むより、知覚するといった方がふさわしいものだと私は思います。そうなら、これは「心を聴く」と言うべきものです。この聞きとったものに対して、乳児期早期では、言語によるラベル付け（例えば、「ミルク飲もうね」の発話と哺乳瓶の出す音）して自覚することはしないので、何を聞いたかを、既成の語を当てはめて解釈することはすべきでありません。前後の行動から、その心象世界を想像して、その発達段階の即した独自の意味づけ（例えば、空腹解消に条件付けられた音と声がもっとも保護的な他者から発せられている）を仮定するほかはないと考えます。

その後、母親以外の人に聴覚的関心が広がるでしょう。さらに、自然現象・動物・社会の発する音にも広がるでしょう。この音の意味は、成人が持つものとは決して同じではありません（例えば、朝に鶏の鳴き声を聞いたなら、鶏の意味ではなく、朝の意味を受け取っているだけなのかもしれません）。それから、言語学習の時期に入ります。

一方、有意な言語理解のない重症心身障害児者では、その人なりの聴覚経験を積んでいること、言語学習の旺盛な時期を過ぎていることにより、健常乳児と同じ聞こえの世界にいることはないはずです。それでも、聴覚優位の知覚世界にいると考えるのは妥当だと思います。そして、最も関心があるのは、人（他者）とその心であると考えるのも妥当だと思います。そして、表情を見て人の心を読んでいるより、その「心を聴く」ことを行っているはずです。どう聞いたかを私たちは正しく知らねばならないと思っています。

横地分類

「移動機能」、「知的発達」、「特記事項」の３項目で分類し、以下のように表記する。

例：A1−C，B2，D2−U，B5−B，C4−D

〈知的発達〉

E6	E5	E4	E3	E2	E1	簡単な計算可
D6	D5	D4	D3	D2	D1	簡単な文字・数字の理解可
C6	C5	C4	C3	C2	C1	簡単な色・数の理解可
B6	B5	B4	B3	B2	B1	簡単な言語理解可
A6	A5	A4	A3	A2	A1	言語理解不可
戸外歩行可	室内歩行可	室内移動可	座位保持可	寝返り可	寝返り不可	

〈移動機能〉

＜特記事項＞
C：有意な眼瞼運動なし
B：盲
D：難聴
U：両上肢機能全廃
TLS：完全閉じ込め状態

こだまの日常活動紹介

鈴木　智子

Aさん（横地分類A1）は、近くで他利用者に職員が話し掛けている声がしたり、鈴のような優しい音が鳴っていたりすると、その声や音に気づき、ゆっくりと目を開けて、目をキョロキョロと動かします。しばらくその声や音が続くと、それまでよりも目を大きく開け、じっと声や音に耳を傾けています。声や音に気づいてから、少しの間声や音が繰り返し続くことで、声や音により意識を向けるようです。

そこで、「風の又三郎」の歌の部分の語りかけをしました。この歌には、「どっどどどうどうどどどうどどどうどどどうどどど